

見過ごされた存在の肖像

芸術研究科 造形表現専攻
写真・映像領域 博士前期課程
2026年3月修了

馬子峰

主査 百瀬 俊哉 副査 大日方 欣一 佐藤 慈

研究背景

幼少期より、学校や家庭においては規則や集団への順応が重視されており、私はその価値観に沿って行動してまいりました。しかし一方で、そのような同調的な環境に身を置くなかで、既存の枠組みに対する微かな違和感や反発の感情も抱くようになっておりました。また、社会的な関係性に配慮し「空気を読む」姿勢が求められる過程で、自身の視線がどのような対象に向けられているのかを意識するようになりました。結果として、人々の視界にありながら注目されにくい存在へと関心が向き、本制作のテーマである「見過ごされた存在」への着目につながっております。

研究方法・目的

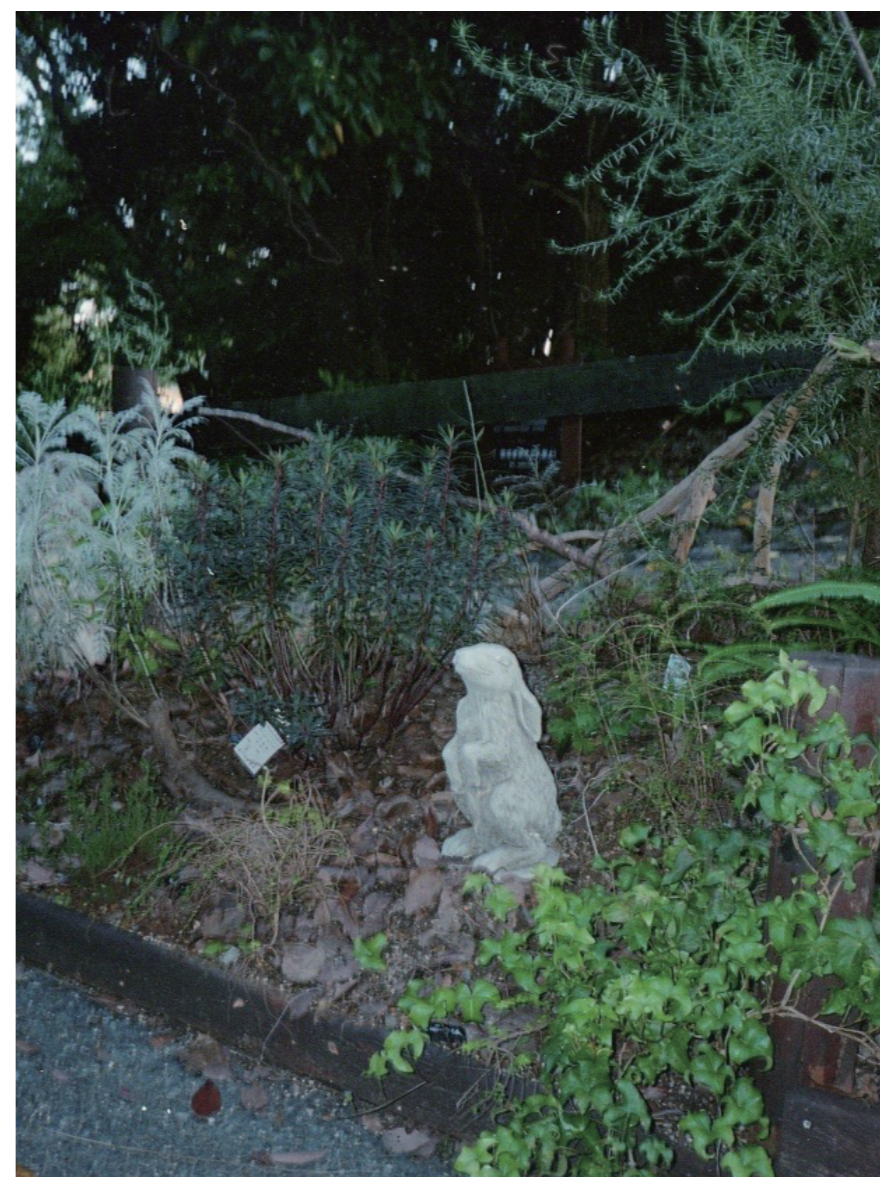
本研究の第一の目的は、「見過ごされた存在」というテーマを通じて、日常における私たちの意識と視線の関係性を視覚的に探究することです。人は常にすべてを意識的に見ているわけではなく、無意識的な傾向によって特定の対象を選び取っていると考えられます。

本制作では、そうした視線の構造を写真表現によって可視化することを試みております。

第二の目的は、制作過程を通じて、自身がどのような対象に惹かれ、なぜその視点を選択するのかを検討し、自己理解を深めることです。以上を踏まえ、日常に埋もれた存在に新たな光を当てる視点を提示する点に、本制作の意義があると考えております。

研究概要

自作：『あゝ、野原』



成果・まとめ

本研究において私が動物園を撮影対象として選択したのは、社会と動物との関係を考察するためだけではなく、自分自身を再認識する契機となったためです。制作を進めるなかで、私はこれまで以上に身近な環境を丁寧に観察し、日常の中で見過ごされがちな存在にも意識が向くようになりました。また、社会構造や他者性、人と自然との関係について思索する機会も増え、自身の「見る」という行為の在り方を改めて捉え直すことができました。

本研究は、私の写真制作を豊かにするとともに、自分と世界との関係をより深く理解する一助となっております。



指導教員コメント

本作品は、「見過ごされた存在」という視点を通して、私たちの日常的な視線の在り方を静かに問い直す試みである。動物園という身近な場を題材に、社会構造や他者性、人と自然との関係を丁寧に観察し、写真表現としてまとめている点が印象的である。制作過程を通じて、撮影者自身の視線の癖や関心の所在が明確になり、自己理解と社会的視点の双方が深められている。日常に埋もれた存在へ新たな光を当てる姿勢は、写真表現の持つ可能性を示している。

百瀬 俊哉